

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：32664

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520390

研究課題名(和文) 子規文庫蔵漢籍に見る漢字文化圏の詩的ダイナミズム

研究課題名(英文) The poetical dynamism of the kanji(Chinese character) cultural sphere in books written in Chinese of Shiki Library

研究代表者

加藤 國安 (KATO, Kuniyasu)

二松學舎大學・付置研究所・教授

研究者番号：70142346

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：子規は地域の熱心な師や親しい仲間、また多数の古典に囲まれて、進取の気象をもって漢詩を学習したことで、鑑賞と創作の豊富な経験を蓄積していった。その詩学的蘊蓄や手法は、後に中国詩を進歩史観から捉えることとも連係して、近代日本にふさわしい短詩形文学を目指そうとする視点へと発展し、積極的に俳句や短歌とコラボする創作活動となっていった。それは東アジア的詩歌圏の視野を持つ近代文学の黎明を告げるものだったといえよう。

研究成果の概要(英文)：Surrounded by regional devoted teacher, close friends, and many classics, Shiki learned Kanshi with an enterprising spirit. So He accumulated enrich experience of the appreciation and creation. This vast stock of poetical knowledge and its technical skill, connected with grasping Chinese poems from the progressive view of history, expanded the development of short poems suitable for modern Japan, invented creative activity in collaboration with Haiku and Tanka. It can safely be said that this is very significant for formation of modern literature with field of sphere in East Asian poetry.

研究分野：中国文学 日本漢文

キーワード：子規 子規文庫 漢学 写本

1. 研究開始当初の背景

明治の漢詩といえば、漱石や鷗外・中野道遙らが思い浮かぶ。彼らの他にも、もっと多くの漢詩人が明治には現れた。その一端は、神田喜一郎編『明治漢詩文集』、入谷仙介等校注『漢詩文集』などに掲載されている。が、これらは個人の別集という形で詩人ごとに作品を選録したもので、明治の漢詩壇の生の空気は伝わってきにくい。当時は漢詩結社の同人誌や各新聞において漢詩が熱心に投稿・講読されており、作者・読者また編集部をつなぐリアルな同好者の一体感があったのだが、その昂揚感も容易に把握しがたい。さらには、こうした漢詩創作がどのような過去の成果と結びつきながら行われたのか。また漢詩が他の文芸様式とどのように連動した形でなされたのかもほとんど分かっていなかった。

当時の漢詩のはらんだ熱気や可能性をこれまで以上に深く捉えることで、近代文学の再構築がはかれるのではないかと考える。

2. 研究の目的

漢詩創作の現場にできる限り迫り、そのプロセスを自己表現の運動体として捉え、何をを用い、それをどのように展開し、またそこからどんな新風景が見えてきたのかについて考察する。これを個別具体的に作品に即して検討し、その総合として明治の漢詩文学は命脈を断たれたという通説を見直し、それが果たした創造的な面を浮き彫りにする。

3. 研究の方法

明治の漢詩論をこうした面から再構築しようとした場合、もっともよい一対象は正岡子規ではないかと思う。子規は松山の少年時代から漢詩の機関誌を主催し、仲間と漢詩の競作に励み、その漢詩集は計七種、作品も計1700~1800首くらいにのぼる。やがて上京、折を見て漢詩の創作を続け、生涯のうちでは計2000首くらいを残している。子規はその中から佳作を選び『漢詩稿』600数十首を自

編集としてまとめた。幸運なことに、子規には蔵書(目録数種)・漢詩抜萃ノート・実作漢詩が揃っている。そこで『漢詩稿』を軸として、その創作環境やプロセス(とくに抜萃ノート研究は未着手)・実作、及びそれと連動する他の文芸活動の関係などを探ることで新地平を開拓することができるのではないかと、考える次第である。

4. 研究成果

(1) 『子規全集』(講談社)第九巻の「解題」に、「少年青年時代に子規は猛烈な知識欲から夥しい筆写を行っている」として、その二番目に「雑記 第三號 莞爾少年記 蘇東坡・陸放翁詩句抜萃。第一号・第二号もあつた筈である」と記される。その所蔵先は長年容易に確認できなかったが、今回の調査で、松山市正宗寺「子規堂」に蔵されていることが分かった。無論、『子規全集』には未収録のものである。子規が松山時代に筆写したものと考えられ、少年期の勉学の一端を伺う上で貴重である。その作品の詩題・選録・配列等を調査した結果、清・趙翼『甌北詩話』巻五 蘇軾、同巻六 陸放翁詩とほとんど一致し、本書から抜萃したことが明らかとなった。

この『甌北詩話』だが、清代の詩歌理論書で全十二巻。李白・杜甫・蘇軾・陸游らについてその事蹟や社会背景と関連づけながら、詩人の創作上の特色を考証的に説明したものである。当時の詩壇は古を尊び今を卑しめる風潮が強かったが、趙翼は自身の考えにもとづき独創性を重視した詩学を確立した。すなわちいかに「日争新」「新意」「新鮮」(『甌北集』巻二十八「論詩」)であるか、また「独創」(『甌北詩話』巻二 杜少陵)的であるかを強く問うた。中でも重視したのは陸游で二巻を割いている。ここに子規が抜萃したのが蘇軾・陸游だったというのは、趙翼の詩学の根幹を洞察し学ぼうとしたことを物語る。これが彼の結社や機関誌編集といった文学

活動の一原点だったことは極めて興味深い。

(2)子規自筆「観山遺稿」(法政大学子規文庫蔵)は、三巻よりなる。末尾に「明治十五年写焉／正岡」と自署されるから、子規が十五歳の時に筆写したものと確認できる。この時、子規はまだ松山にいたので外祖父・観山の遺稿を直接手にとって写したと考えられる。子規は観山から多くを学んだが(研究が進むほどじつに多様であることが分かってきた)。今回対象としたのは、子規自筆『観山遺稿』とその選集の刊本『蕉鹿窩遺稿』の校勘である。比較すると、種々異同が発見され、『蕉鹿窩遺稿』には明らかな誤字と思われる箇所が散見され、むしろ子規の写本がすぐれていることが確認される。それは子規が観山遺稿を直接見て写したのに対して、『蕉鹿窩遺稿』は息子の加藤拓川が死の迫る病牀で選択・校正を行わなければならなかったことに拠る。では、『観山遺稿』の原本は現存するのか。調査すると子規記念博物館に、「観山遺稿 詩三百九十首」が蔵されていることが分かり閲覧。本文冒頭には、「天保戊戌〔九年〕先人年二十一始遊江戸是其途中作」と朱書されていた。が、『蕉鹿窩遺稿』は観山の没年までの作品を収録するのに比し、この稿本は青年期に限定したもので、その一部にすぎない。中晩年期の作品の調査は今後の課題である。

(3)『随録詩集』第一編(法政大学子規文庫蔵)は、原念斎『先哲叢談』からの抜粋に始まり、日本漢詩人(全国 地方〔伊予 讃岐 伊予〕)の順に筆写される。伊予関係者では、子規の外祖父・大原観山(十六首)、松山藩医・天岸静里(十首)、子規の三師の一人・服部楠谷・縁戚・藤野海南、以下子規の三師の一人・河東静溪、松山藩明教館教授・近藤南洋ら多数が並ぶ。いわば身近な家族や縁戚、また師や知人らの漢詩であることから、親しみをもって読みかつ抜粋したと思われ、文芸の魅力を深く鑑賞するのに役だったことだ

ろう。ことに久米駿公「岐阻道中雑詩」は、子規の大作「岐蘇雑詩」に大きな影響を与えたと考えられる。この後は讃岐の詩人ら一渡辺橙斎・三土樗堂・中村三蕉・赤松棕惜・三井竹窓・久保蘿谷・長尾真海一が列挙され、最後に再び伊予関係者に戻る。内容としては、田園・散水・詠史・詠懐・歳時・風俗・紀行・名勝詩などだが、加えて時事詩や海外詠も取り上げる。子規はそうした当世風の話題さえも、この「随録」に抜粋しているのである。

(4)『随録詩集』第二編(国立国会図書館蔵)の冒頭部分は、『古文真宝』前集(子規文庫にあり)より作品の順に飛び飛びに抜粋したものである。続いて「白居易詩集」、陶淵明「雑詩」や蘇軾「司馬温公独樂園」らが続き、超俗的高踏的な文人の生を誇らしく思う気持ちが見られる。李白「月下独酌」「独酌」から「把酒問月」までの豪気も、大いに気に入ったと思われる。また「夢李白」では、杜甫の李白への強い尊敬心に感じ入りもしただろう。子規本人が少年期以来そのような交友に憧れていた。さらに陶淵明「責子」や杜甫「贈衛八处士」などの濃やかな日常観察の家族詠などは、後年の子規のリアリティ豊かな人間描写の一源泉となっただろう。

「琵琶行」まで白居易を三十一首連続筆写した後、陳銓に至る約十丁分の中国詩からの抜粋は、時代的にも明清詩まで降って拾おうという意図が看取される。さらにその後には、菅茶山・梁川星巖・広瀬旭荘といった子規が大きな影響を受けた詩人が続く。これらの抜粋詩を通して、子規は月並みな日常の中の小さな季節や風物との遭遇、かすかな一瞬の目撃に、意外に多くの関心を寄せていることが確認される。それは後年の写生俳句へと大きく発展していく素地となるものといえよう。また「粲雪別草」(富士のよせ書)は、講談社版と子規自筆写本とを校勘した結果、子規写本が正しく講談社本は誤字が少なく

ないことも判明した。

(5) 『随録詩集』第四篇(国立国会図書館蔵)は、杜甫・陸游・梁川星巖・広瀬旭莊・大沼枕山らの漢詩抜萃からなり、さらに「王荊公詩註」「劍南詩鈔」「歳晩類集」(法政大学子規文庫蔵)、「黄葉夕陽村舎詩・遠思楼詩巻・春草堂詩鈔」(国立国会図書館蔵)がある。こうした中国・日本の詩人らからの豊富な受容については、『子規蔵書と『漢詩人』研究』及び『杜甫生誕 1300 年記念研究論集』(「杜甫の越えてゆく言葉—子規の眼」)等で詳述した通りである。すなわち人生行路をたどる過程で、子規は彼らから文人としての覚悟を学び、また表現技術や新鮮な視点を取り入れ、嗜血や半身不随の身になりながらも、日々の生の尊さを深く感じ、またその表現を通して実在の根底に触れることで、近代人の内面を旺盛に開拓していった様子を窺うことができるのである。

子規は晩年当時の漢詩結社や詩社が賑わいをみせていることに注目しているが、その背景には近代学校下において国民皆教育となった当時の漢文教育や、またメディア・出版文化の発達も絡んでいる。いずれはこの領域も詳細な実態が見えてくる時がこよう。このような漢文学習あるいは詩社・同人誌の熱気も含めたより総合的な形で、近代文学は考察されなければならない。

またその後の調査で「観山遺稿」の新たな原本が見つかり、初見段階ではあるが観山が何度も修正を重ねていたことが分かってきた。その詳細な分析も今後の大きな課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

加藤國安、『子規全集』未収録・自筆漢詩抜萃写本：「雑記」第三号翻刻・解題、名古屋大學中國語學文學論集、査

読有、No.25、2013、pp.119-136、

<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/handle/2237/18811>

加藤國安、『子規全集』未収録・自筆漢詩抜萃写本：王荊公詩註・劍南詩鈔・歳晩類集、

名古屋大學中國語學文學論集、査読有、No.26、2013、pp.87-109、

<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/handle/2237/19596>

加藤國安、『子規全集』未収録・自筆漢詩抜萃写本：黄葉夕陽村舎詩、

名古屋大學中國語學文學論集、査読有、No. 28、2014、pp.117-157、

<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/handle/2237/22966>

〔学会発表〕(計5件)

加藤國安、「子規「岐蘇雜詩二十首」とその詩囊」、東洋文化振興会、2012年07月14日、新日本法規出版社名古屋支社会議室(愛知県名古屋市)

加藤國安、「杜甫の越えて行く言葉—子規の眼」、第31回和漢比較文学学会、2012年09月29日、同志社女子大学(京都府京都市)

加藤國安、「古典の開示と感知—文学的資源の未来」、第13回名古屋大学・大阪大学中国学研究交流会、2014年11月15日、大阪大学(大阪府豊中市)

加藤國安、「正岡子規の漢詩」、第31回漢文教育研修会(全国漢文教育学会)、2015年8月21日、二松学舎大学九段キャンパス(東京都千代田区)

加藤國安、「明治漢文教科書に見る備中人の漢学」、国際シンポ「近代東アジアの漢学と教育」、2016年3月12日~3月13日、岡山県倉敷市立美術館講堂(岡山県倉敷市)

〔図書〕(計 8 件)

加藤國安、杜甫の越えてゆく言葉—子規の眼、『杜甫生誕 1300 年研究論文集』、研文出版、2013、pp.405-435、

加藤國安、『子規蔵書と『漢詩稿』研究』、研文出版、2014、615 頁

加藤國安、科研報告書『『子規全集』未収録・自筆漢詩抜萃写本』、2016、192 頁

加藤國安、明治漢文教科書集成第 期(第 1・2 卷)、不二出版、2013、753 頁

加藤國安、明治漢文教科書集成第 期「解説」、不二出版、2013、240 頁

加藤國安、明治漢文教科書集成第 期(第 3・4・5 卷)、不二出版、2014、1513 頁

加藤國安、明治漢文教科書集成第 期(第 6・7 卷)、不二出版、2015、983 頁

加藤國安、明治漢文教科書集成第 期『解説・総索引』、不二出版、2015、313 頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 國安 (KATO, Kuniyasu)

二松学舎大学・東アジア学術総合研究所・教授

研究者番号：7 0 1 4 2 3 4 6

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：